

‘dog’ は「ドッグ」ではない——語と句のアクセント

日本語でも英語でも、語は1つ以上の音節(syllable)から構成されています。ある語において、ある特定の音節が他の音節よりも目立って聞こえる場合、その音節には**アクセント(accent)**があると言います。日本語(共通語)の場合は語を構成する各々の音節ごとに(相対的な)声の高さ(pitch)が決まっており、**高低アクセント(pitch accent)**を形成しています。次の例を参照(cf. 竹林・斎藤 1998: 153, 154):

- (1) ウシ<牛>(低高)、カタチ<形>(低高高)、トモダチ<友達>(低高高高)
- (2) サムイ<寒い>(低高低)、サビシイ<寂しい>(低高高低)、ニワカアメ<にわか雨>(低高高高低)
- (3) ソラ<空>(高低)、イノチ<命>(高低低)、コウモリ<こうもり>(高低低低)

この(1)-(3)は東京式アクセントの場合です。ちなみに京阪式アクセントでは次のようになります:

- (4) ウシ<牛>(高高)、カタチ<形>(高高高)、トモダチ<友達>(高高高高)
- (5) サムイ<寒い>(高低低)、サビシイ<寂しい>(高高低低)、ニワカアメ<にわか雨>(高高高低低)
- (6) ソラ<空>(低高)、イノチ<命>(高低低)、コウモリ<こうもり>(高低低低)

このような声の高さの違いによる高低アクセントに対して、英語のアクセントは強勢(stress(=声の強さ))の違いに基づく**強弱アクセント(stress accent)**が基本です。たとえば **communication** という語は発音記号で表記すると /kə-mju:-nə-keɪ-fən/ であり、5つの音節から成っていますが、このうち4番目の音節である /keɪ/ が最も強く発音されます。すなわちこの場合、/keɪ/ に最も強いアクセント(=第一アクセント(primary accent))があります。次に強いアクセントがあるのが /mju:/ で、これが第二アクセント(secondary accent)になります。第一アクセント・第二アクセントの記号を付加して発音記号を示すと次のようになります(竹林・斎藤 1998: 154):

- (7) communication /kə-mjù:-nə-kéɪ-fən/

ここで重要なことは、第一アクセントのある音節は、最も強く発音されるだけでなく、高くかつ長く発音され、第二アクセントのある音節は若干高く発音されるということです。(7)の発音記号をもし片仮名で表すとしたら、「カミューナケーイ(↓)シャン」(「ケーイ」と「シャン」の間で一気にピッチが下がる)のようになります(薄い字の部分は第一アクセントも第二アクセントもない部分(=弱く発音される部分)です)。

上で見た **communication** は5音節から成る語ですが、1音節のみで構成される語(=単音節語(monosyllabic word))の場合、その音節が /æ/ /ɔ:/ などの**強母音(strong vowel)**を中心としたものである場合は、その音節は第一アクセントが置かれ、強くかつ高く長く発音されます。たとえば次のような場合、

- (8) dog /dɔ:g/ cat /kæt/ bat /bæt/ bed /bed/ book /buk/ dry /draɪ/ house /haus/

つい母音を短く発音してしまいがちですが、これらの母音は強母音で第一アクセントがあるため、実際は長めに発音されます。したがって dog は「ドーグ」、cat は「ケアート」のような音になります。

上で見たのは単一の語の例でしたが、2語以上の語が連鎖を成している場合は、アクセントに関して注意すべき点があります。その一つは**複合語(compound)**の場合で、語と語が結合して複合語になると、第二要素の語のアクセントが第二アクセントになることがあります。次の各例を参照(竹林・斎藤 1998: 161, 162):

- (9) áirpòrt hóney-mòon políce dòg políce stàtion grándfàther tràffíc contròl
cán òpener láwn mòwer hóusekèeping bírd wàtching fórtune tèlling

さらに、複合語において第一要素・第二要素とも語のアクセントはそのまま保たれても、第一要素の第一アクセントではピッチの変動がなくなると、第二要素の第一アクセントにおいてのみピッチが下降する場合があります。次の各例を参照(竹林・斎藤 1998: 162):

- (10) dównstàirs sécondhánd bróad-mínded príme mínister

たとえば downstairs の場合だと、down の所ではピッチは変わらず、stairs の所で一気にピッチが下がる形になります。さらに、本来それぞれ形容詞・名詞であるものが連鎖を成している場合、それが「複合語」であるかまたは単なる「形容詞+名詞」であるかによってアクセントの型が変わることがあります。原則として前者の場合は(9)と同様の型、後者の場合は(10)と同様の型になります。次の各例を参照(cf. 竹林・斎藤 1998: 163):

- (11) bláckbird (ツグミ(鳥の一種))(複合語) bláck bírd (黒い鳥)(形容詞+名詞)
gréenhòuse (温室)(複合語) gréen hóuse (緑色の家)(形容詞+名詞)
Whíte Hòuse (ホワイトハウス(米国大統領官邸))(複合語) whíte hóuse (白い家)(形容詞+名詞)